Research Institute for World History

Newsletter

No. 17　August 2011

CONTENTS

■「アメリカ世界史学会（WHA）第 20 回大会・北京」
南塚 信吾

■「WHA 参加記」
桃木 至朗

■「文献紹介　デニス・フリン（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』山川出版社、2010 年」
木村 真

■「文献紹介　中村薫「世界史教育の課題と今後への提言 ――世界史の構成および地歴総合科目について」（『総合歴史教育』（総合歴史教育研究会）第 45 号、2009 年、13-24 頁）」
鈴木 健太

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

世界史研究所「ニューズレター」第 17 号（2011 年 08 月）

アメリカ世界史学会（WHA）第 20 回大会・北京

南塚 信吾

2011 年 7 月 6 日から 10 日まで、北京市にある首都師範大学において AWH（World History Association）の第 20 回大会が開催された。WHA は 3 年に 1 回は合衆国以外で大会を開いており、前回の「国外」編は 2008 年にロンドンで開催されていた。今回は首都師範大学の「全球史研究中心」（Global History Center）が受け入れ大学となって、大会を開いたのである。

中国では、歴史の教育と研究は「中国史」と「世界史」に分けられており、世界史ではもっぱら外国史を扱ってきている。「全球史」というのは、この中国史と世界史をともに含みこんだ歴史を目指すという意味で使われている概念であり、過去 20 年ほどのあいだに、中国各地の大学において「中心（センター）」組織としてさかんに作られてきている。そのような中国の歴史の傾向を反映して、大会では中国の歴史家が積極的に活躍し、中国をからめて世界史を考えるというテーマが数多く設けられていた。

わたしは AAWH の代表として、WHA と密接に協力し合おうという WHA 会長の Alfred J. Andrea らとの約束を守って参加したわけであるが、個別的には世界史研究・教育の比較に関するプロジェクトにおいてプレゼンテーションをすることも仕事であった。

＊＊＊

まず、今回の大会で何よりも注目を集めていたのは、昨年設立された「国際ビッグ・ヒストリー学会」The International Big History Association（IBHA）が登場したことであろう。ビッグ・ヒストリーというのは、「宇宙、地球、生命、人類の歴史を統一的にしかも学際的に理解する試み」であるとされる。本部は、合衆国のグランドバレー州立大学におかれ、2012 年 8 月 3-5 日に第一回大会を予定している。会長は、オーストラリアのマクワイアー大学のデイヴィド・クリスチャン David Christian である。

今回、まず初日に IBHA 設立を記念するラウンド・テーブルが設けられたほか、ビッグ・ヒストリーに関連するセッションがいくつも置かれてい

た。それは、Big history & Theory, Big History and Education, Big History & Its Application, Big History across Boundaries, Research Agendas defining Big History など多様であった。もちろん、ビッグ・ヒストリーの重要な課題であるエネルギー問題、核エネルギー問題はツナミ、フクシマに関連しても議論されていた。

＊＊＊

参加したのセッションは World History Across the Globe: A Survey of Teaching and Research と題するもので、カイロ・アメリカ大学のデイヴィド・ブランクス David Blanks が中心になって組織したものである。

わたしは、World History Teaching in Asia というテーマで報告をした。AAWH が 2010 年 11 月から開始したアジア諸国の世界史教育アンケートを材料にしながら、アジア諸国での世界史教育の現状と、世界史教育の歴史を、比較史の観点から検討してみた。まだアンケートが十分に集まっていない段階（回答をえたのは、韓国、中国、シンガポール、インドネシア、日本）での取りまとめなので、不十分なものではあったが、ある程度の概観は得られたものと考える。

アジア諸国における世界史教育（大学以外における）の特徴は以下のように纏められる。

(1) アジア諸国における世界史教育は、比較的強い政府の関与の下で行われる歴史教育の中で、行われている。
(2) 19 世紀中ごろまでは、中国中心の世界史が広がっていて、それ以後の歴史教育は中華的世界史からの脱却を課題とした。
(3) 9 世紀の中ごろからは、ヨーロッパ中心の世界史が欧米から直接にアジア諸国へ、あるいは日本を経由して朝鮮・中国などへ広がった。そして、自国史とアジア史と世界史、あるいは自国史と世界史という組み合わせで歴史が構成された。これは基本的には現在まで続いている。インドネシアでは自国史とイスラーム世界史、シンガポールでは自国史と国際史となっている。
(4) 第二次世界大戦後は、一時、ソ連からマルクス主義的な世界史とされる歴史が中国や日本に影響を与えた。
(5) ほぼ 1980 年代のグローバリゼーションの中で、アジア諸国すべてにおいて自国史と世界史といった区分のない世界史ないしはグローバル・ヒストリーが求められ、試みられるようになってきた。
(6) 中華的な世界史やヨーロッパ中心的な世界史を乗り越えようとしてきたわれわれは、いいまやアジア的な観点からの世界史がどう描けるかを課題にしなければならない。

マレーシアの国際イスラーム大学のアフメド・アブシュークは、中東諸国の主な大学における世界史のカリキュラムの分析を行った。それによると、中東諸国の中でも世界史の論じ方には違いがあって、イスラーム的な方向、パン・アラブ的な方向、西欧中心的な方向などの相違が見られるという。

最後にデイヴィド･ブランクスは､このセッションのために 1 年あまりかけてアフリカの 100 近い大学にアンケートを送ったものの、どこからも返事がなかったと落胆していたが、それでも電話などでのヒアリングから、アフリカ諸国での世界史教育はほとんど始まっておらず、ヨーロッパ史が世界史として教えられている程度であることが分かったと語っていた。

本セッションの本来の狙いは、AAWH のプロジェクトに倣って、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国における世界史の教育と研究の現状を比較調査しようというものであったが、ラテンアメリカが参加できず、アフリカの調査もほとんどできなかったため、やや中途半端に終わった感が

する。ブランクスらとは、さらにこういう調査研究を継続しようということを話し合った。

＊＊＊

総じて、今回の WHA の大会は中国の歴史が世界史の中で議論されるという画期的な機会となったようであり、今後、中国の歴史研究者・教育者が国際的な場で、「中国中心」ではない歴史の構築に参加してくれることを大いに予想させるものであった。

WHA 参加記

桃木 至朗

この 7 月 7 日から 10 日まで、WHA（アメリカ中心の世界史学会）の大会に参加するため北京に行ってきた。昨年 2 月の清華大学主催のシンポ以来、2 度目の北京である。

ハワイに拠点のあるこの学会は毎年大会を開くが、3 年に 1 回だけアメリカ以外で行うのだそうで、今回は首都師範大学が会場だった。昨年、首都師範大の先生が阪大に来られたのをきっかけに参加することとなり、ポストドクターの向正樹君を中心に、われわれ海域アジア史研究グループの親友で宋元代東南アジアを「初期交易の時代 Early Age of Commerce」と見なすジェフ・ウェイド Geoff Wade の説と、それに対するヴィクター・リーバーマン Victor Lieberman の批判を枕にパネルを組んだものである（タイトルは Reconsidering "Early Age of Commerce" in Wider Regional and Historical Context。 6 月 4 日の海域アジア史研究会特別例会で予行演習をした。そのときのレジュメ集の英訳を向君の手配で作って持って行った）。以下の報告メンバーのほか、伊藤一馬、中村翼、吉川和希の大学院生 3 人も出席した。また、中田美絵さん（唐代仏教史）も報告のために参加したし、藤田加代子さん（立命館 APU）や南塚信吾先生にも会うことができた。

問題提起および司会は向君とウェイドが行い、報告は山内晋次（宋への日本産硫黄の輸出を中心とする「硫黄の道」）、四日市康博（元代の交易とムスリム商人の拡散）、それに第 1 回 AAWH にも参加したシンガポール国立大の大学院生であるベトナムのドー・チュオン・ザン Do Truong Giang（アジア貿易とチャンパー）による 3 本で、私は最後にコメントをした。ザン報告は碑文などを取り上げつつチャンパーの例でウェイドの議論を支持し、さらにウェイドの議論と同時期の日本列島の例を紹介して東北アジアも含む交易の発達を論じた山内報告も、ウェイドの議論を支持・補強する方向だったのに対し、四日市報告の力点は、モンゴル時代の交易の停滞を主張するウェイドの議論を批判する点にあった。東南アジア大陸部を中心に中近世のグローバルな比較史の巨編 Strange Parallels を書いた (2 vols., Campridge University Press, 2003; 2009) リーバーマンの名前も出たせいか（かれの著作はあちこちのパネルで話題になっていた）、聴衆はかなり多く、日本について新しい内容を明晰に話した山内報告は、とくに好評だった。

私のコメントは、宋元代に交易ネットワークが発達したという主張に賛同しつつ、資料の精査が

不十分であり（たとえば宋会要輯稿の朝貢記事）、交易史そのものに未解明な点が多いこと（元代のマラッカ海峡の変動も）、各国家・地域社会の構造はそれだけでは理解できず、農業社会との相互作用に注目すべきであること（たとえば英語圏では単純に海岸部への権力中心の移動＝海上交易の発展、ととらえられている大越の紅河デルタ開発と 14 世紀の社会変動については、人口学的要因を背景とした農業開発の拡大を無視できない）の２点を指摘した。「ひとつだけの考え方で進む」ことが性格的にできない私は、「海域アジア史」という考え方が広まってうれしい一方で、「猫も杓子も交易」「なんでもかんでもネットワーク」という最近の風潮（？）には賛成しかねるのだ。

われわれのパネルは初日（金曜日）の午前に組まれた最初のパネルのひとつで、その後はめいめい好きなパネルをのぞいたり、街に見物に出た。日曜の午前までに、合計 118 のパネルないしラウンドテーブルが開かれたが、いちばん感心したのはそのうちに歴史教育（中学・高校・大学）を扱うものが、プログラムのタイトルから判断するだけで 16 もあったこと、それ以外のパネルでもしばしば教育が話題に上ったことである。北京とカリフォルニアの中学・高校での世界史教育を対比する大きなパネルをたまたま聞くことができたのだが、「こんなにうまくやったんだ」」という自慢話でなく、放っておいたら生徒は歴史など興味をもたないことなど、「いずこも同じ」悩みが聞けて親しみが湧いた。カリフォルニアの学校で 18 世紀中国について Centralized Bureaucratic Empire だと教えようとしたら、生徒が centralized も bureaucratic も empire もわかっていなかったといった話も、日本で高校教科書を書く際に悩まされる点と同じである（余談ながら、カリフォルニアの先生たちの英語が揃って聞き取りやすかったのは、多様な出身・言語能力の生徒たちを教えているせいか）。

教育以外では、学会の性格上当たり前なのだが、自然史などを含んだ Big History のパネルがいくつもあったし、東南アジア史など特定地域に関する発表でも、（英語圏の研究者は）その多くが「世界史」にどう位置づけるかを論じていた（たとえば東欧史やアフリカ史の研究者が東南アジア史の報告について、そこを切り込んでくる）。よほどの識者以外は軽々しく「大きな世界」など語ってはいけない、もしくは「世界を語ることは即地域の個性を無視することだ」という考え方の強い、東南アジア史を含む日本の歴史学会では考えにくいことである。ヨーロッパ史や中国史の専門家が東南アジア史を無視しないということも含め、学界のありかたが違うのだろう。他方、中国の学界についていえば、多くの研究者が素朴に（？）グローバルヒストリーを受け入れている様子がうかがえ－書店でも実に多くの本が並んでいる－これも興味深かった。グローバルヒストリーに対して、中身を知る前に拒否感を示す人が多い日本の学界は、やはり徹底的に国民国家を背負った学界なのだろう（ちなみに、何度も書いているように、私は世界全体の関係性 や構造を直接論じるという意味での狭義のグローバルヒストリーが万能だとは思わないが、「世界全体を見ること自体を拒否する」グローバルヒストリー批判には、どうしても賛成できない）。なお、プログラムを見るかぎり、ジェンダー史の報告はきわめて少なかった。日本で言われている通りジェンダー学は言説研究に親和的で、この会のような「大きな世界の議論」は逆にジェンダーに鈍感なのだろうか？

最終日（日曜）の最後のセッションは、近世世界のなかの中国に関するパネルに行き、ビン・ウオンやケネス・ポメランツの報告を聞いた。２人とも銀の動きなど関係性を当然の前提としながら、「近世性」のメルクマールとして中国の国家・社会自体の方向性や制度の特質を問題にしていた（ように私の英語力では聞こえた）。もっともなことだろう。ただ、「それだけではダメだ」という文脈だったと思うのだが、ポメランツ

が Maritime Asian Network という言葉を何度も使っていたことは、言葉の広がりという面ではうれしかった。

最終日を除き昼間の気温は高かったが、湿度が低いのでしのぎやすかった。ホテルや食事も概ね素晴らしかった。フルペーパーがいらないという会の仕組みのもとで、パワーポイントだけどころか完全に口頭だけで発表するスピーカーもおり英語が聞き取れないとお手上げだったこと、東南アジア史のケネス・ホールやベトナムのホアン・アイン・トゥアンなどエントリーしていて来られなかった人が何人かいたことなど、疑問や残念な点もあったが、全体に収穫が多い学会だった。向君ほかに感謝。

文献紹介

デニス・フリン（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』（山川レクチャーズ 7）、山川出版社、2010 年

木村 真

グローバルヒストリー、もしくは世界史研究と呼ばれる研究分野が、近年世界のさまざまな地域で注目されてきている。日本を含むアジア地域でもアジア世界史学会（AAWH）が設立され、世界史研究の基盤とネットワーク作りが進められている。こうした研究動向を背景として、日本内外の世界史研究動向の紹介やグローバルヒストリーと題する著作も刊行されるようになった。『グローバル化と銀』と題する本書も、このような歴史研究の動向を反映した著作である。

本書には、グローバル経済史研究の分野で多くの研究を発表してきたアメリカ合衆国の研究者、デニス・フリンの主要な 3 論文（いずれも翻訳）と編者によるフリンの研究の解題と研究史上の位置付け（冒頭の「銀の流通からみた世界史の構築」）が収められている。以下、フリンの論文を中心に簡単に紹介する。

本書に収められたフリンの最初の論文は、「グローバル化は 1571 年に始まった――新大陸銀とマニラ・ガレオン――」と題している。この論文は 2005 年の大阪大学グローバル・ヒストリー・セミナーにおけるフリンの報告ペーパーの翻訳であるが、フリンはここで、研究者の間だけでなく一般にもよく用いられる「グローバル化」という言葉を以下のように定義することを提案する。「人が居住するすべての大陸が地球規模での交易をとおして深くつながり合い、継続的な交流が始まったときにグローバル化は始まった」と。さらにフリンは、世界規模での交易は（1）人口稠密なすべての大陸が産物を継続的に交換し始め、（2）取引量がいずれの取引相手にも何らかの継続的な影響を与えるに十分な量に達する状況下で芽生え、スペインが物資集散地としてマニラを建設した 1571 年以前には、アメリカ・アジア間に直接の交易ルートはなく、この年以降世界市場はつながったのだと論じている。

グローバル化の始まりをめぐっては経済史家のジェフリー・ウィリアムソンとケビン・オルークの 1820 年代の商品価格の国際的平準化の始まりを論拠とする主張も有力だが、フリンは価格収斂の歴史の重要性は認めつつも、それはグローバル化が 16 世紀に誕生してからかなりあとのことと論じている。

フリンは、貨幣ではないモノの交易での不均衡の埋め合わせとして銀が中国に流入するという描写ではなく、銀市場のなかでの価格差が地球規模での交易の要因と認識すること主張している。

第二論文の「徳川幕府とスペイン・ハプスブルク帝国――グローバルな舞台での二つの銀帝国――」において、フリンは中国市場を中心とする銀による世界市場の統合の過程における諸要因を考察する。さらに、アメリカ大陸の鉱山をもつスペイン帝国と徳川日本が世界の銀市場にどのように対応したのか。その相違点と共通性に着目し比較考察している。特定の物産について、一つの世界市場と区別されながらかさなりあった市場（局地市場 submarkets）が同時に存在していたと論じ、相互に結びつく銀市場を構想している。

第三論文の「貨幣と発展なき成長――明朝中国の場合――」においては、地球規模の交易が始まるに際して、中心的な役割を果たした銀の集まる明朝中国の経済に注目する。フリンは、以下のように主張する。16 世紀初頭何万トンもの銀が日本、メキシコ、ペルーで採掘され、その大部分が向かった先が明朝中国だった。それは銀価格が世界中で最も高かったからである。15 世紀明朝の紙幣制度が崩壊したのち、明朝は銀を金融・財政制度の基軸に据えた。世界人口の四分の一を占める中国の発展した経済は、長期にわたり銀をその礎としたため、需要側の要因から銀の価格は中国国内で上昇し、他の地域の二倍となった。その結果、スペイン領アメリカや日本の鉱山から中国大陸へと銀が引き寄せられることになった。その通り道は、長崎、台湾、インド、インドシナ、大西洋、ケープ・ホーン、アカプルコ―マニラ、太平洋、地中海、紅海、バルチック海（バルト海）、ロシア、オスマン帝国、シルクロードなど、さらに他のルートもあったであろう。私的・公的を問わず金儲けに関心をもつ世界中の者は、世界のなかでもっとも豊かな市場に向けての銀の運び込みに加わることで利益を得たからである。消費市場である中国と銀鉱山を結びつける交易に加わることによって、利潤を得ていたのだと。

さらにフリンは、明朝中国への数百年にわたる銀の流入は、中国の消費市場自体の長期的経済発展に貢献したのかどうかを検証し、何世紀にもわたる外国からの銀の流入に対応して、中国の経済成長は起きたが、経済発展を阻害したと論じている。明朝中国は銀の購入のために巨額の輸出品が必要となった。絹である。絹の輸出に投じられた資源は、紙幣制度から銀本位制への通貨・財政制度への移行を促すのに必要となった資源を象徴しているのだとフリンは述べ、紙幣制度の下で非通貨部門に投下可能であった資源が、銀本位制維持のために通貨・財政部門に縛り付けられることになったと主張している。

相互に関連するフリンの 3 つの著作は、銀の世界規模の流れを通じて、世界史研究の一つのアプローチを示しているといえよう。

最後になるが、編者による「銀の流通からみた世界史の構築」は、グローバル化の歴史的起源をめぐる論争をはじめ、フリンの研究テーマについて大変有益な説明を与えてくれる。

文献紹介

中村薫「世界史教育の課題と今後への提言 ――世界史の構成および地歴総合科目について」(『総合歴史教育』(総合歴史教育研究会)第 45 号、2009 年、13-24 頁)

鈴木 健太

世界史教育に関しては、2006 年秋に全国の高等学校で表面化した「世界史未履修問題」を契機に、世界史科目のあり方やその制度をめぐる様々な問題が提起されるようになった。これについては、過去の世界史研究所『Newsletter』でも扱われている（同 9 号「特集 : 世界史教育は不要か」、同 11 号「高校における地歴教育のあり方をめぐって」（油井大三郎氏））。今回は、中村薫氏による「世界史教育の課題と今後への提言――世界史の構成および地歴総合科目について」を取り上げたい。著者は教育学の視座から世界史教育を専門にしており、他にも単著『世界史教育の視点と方法』（2005 年）を上梓している。

「未履修問題」は高校地理歴史科教育全般に関する論議へと発展し、高校や大学の教員のあいだでもこれまでその対応策が議論されてきた。その中心のひとつが、日本学術会議が 2008 年 6 月に開催したシンポジウム（「高校教育における時間と空間認識の統合――世界史未履修問題をどう解決するか」）である。著者はそこで世界史分野のコメントを担当している。本論稿は、同シンポジウムの議論を踏まえつつ、こうした世界史教育の将来像への模索が続けられる状況に臨み、著者が独自の提言を記したものである。

論考の主眼は、高等学校の世界史教育に対する具体案の提示にある。著者が提起するその案とは、「終わりに」で端的に示されるように、地理歴史科における「世界の諸地域」および「現代世界」という 2 つの必修総合科目の設置である。前者は、世界史 A の「諸地域世界」と地理 A の「世界の生活・文化の地理的考察」を融合したものであり、それぞれの地域の自然・文化・歴史・経済・日本との関係等を対象にする。後者は、世界史 A と日本史 A の現代史の部分を組み込んで、現代世界（日本を含む）の諸問題を取り上げ、それらの歴史的背景を学ぶというものである。以上について、教育現場の実態と生徒の声、学習指導要領の具体的諸項目、教科書の内容という、世界史教育の現場を構成する諸要素を踏まえながら考察を展開している。

総合科目の提起にあたって、著者は現在の世界史教育の問題点を 2 つにまとめている。近年、生徒の地理的知識が著しく低下し、世界史の教員が授業の際に困惑を覚え、それが地理教育の問題としても認識されるようになったこと。また、世界史授業の実態として、必修科目の世界史は授業時間の制約等から最低単位の 2 単位で済まされることが多い。そのため、古い時代から授業が進むものの、大学受験を意識し過ぎて内容が詳しくなり、現代の時代まで教えられない状況があるという。

これに対し、地理歴史の総合的な科目がひとつの可能性となるが、前述の日本学術会議のシンポジウムで、その方針は否定された。しかし、世界史 A と地理 A の教科書の内容をみれば、両者には取り上げられる地域の相関性が高いことが分かり、世界史と地理の統合は可能であると著者は主張する。それが「世界の諸地域」という総合科目である。

一方、「現代世界」は、先のシンポジウムで具体的に提案されていた歴史基礎科目（必修）に応えるものである。歴史基礎は、まず世界史を叙述して次に世界史の中における日本の位置を記すという、いわば日本史を含んで世界史を大観する新たな科目である。著者はこれについて賛同を示しつつも、世界史学習に関する生徒への調査結果から、20 世紀以降を扱う項目「地球世界の形成」に対して生徒の関心が高い点を挙げる。その時代を詳しく学習する機会を保障する必要性を強調し、現代に関して世界史 A と日本史 A を統合したのが「現代世界」である。

このように世界の諸地域」と「現代世界」という 2 つの新たな必修科目が提案され、その際、従来の世界史科目は、日本史・地理とともに選択科目としての世界史となる。著者によれば、現在

と 50 年前の中学校の歴史教科書の内容を比べると、中学校で扱う世界史的内容は大きく減り、高等学校で従来のような世界史を展開することは難しくなった。こうした現状も踏まえて、本論稿は、世界史が必修となった 1989 年の学習指導要領以来の、より抜本的かつ柔軟な変革案を世界史教育に向けて提言するものとなっている。

アジア世界史学会パネル公募のお知らせ

すでに HP でもお伝えしておりますように、アジア世界史学会（AAWH）第 2 回国際会議ソウル大会が、2012 年 4 月 26 日（金）- 28 日（日）にソウル市の梨花大学で開催されます。

つきましては、パネル報告を募集しております。3 ～ 4 名で外国人（コメンテーターとしての参加も可）を含む形が望ましく思われます。締め切りは 9 月 15 日（木）です。

申し込み用紙は以下のサイトからダウンロードできます。どうぞ積極的にご参加ください。

→ http://home.ewha.ac.kr/~iwgh/aawh/html/data/AAWH_ProposalSubmission.pdf

今後とも年 2、3 回のニューズレター発行を予定しております。
本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2011 年 08 月 26 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（法政大学教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
	Ivan T. Berend（UCLA 教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学普遍教育センター特任教員）
	崎山 直樹（千葉大学人文社会科学研究科特任教員）
	鹿住 大助（島根大学教育開発センター講師）
	鈴木 健太（東京大学大学院博士課程）
特別研究員	近藤 正憲（学術博士）